

# Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名：国際収支(2005年12月)

発表日：2006年2月13日(月)

～所得収支黒字の増加から、経常黒字は緩やかに拡大～

(No. J - 230)

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 副主任エコノミスト 新家 義貴

TEL : 03-5221-4528

		原数値 経常収支				季調値 経常収支			
		貿易・サービス収支		所得収支		貿易・サービス収支		所得収支	
		貿易収支				貿易収支			
		前年比	前年比	前年比	前年比	前期比	前期比	前期比	前期比
04	1-3月期	43.2	82.9	42.3	9.9	7.4	7.5	2.1	5.3
	4-6月期	20.3	25.3	32.8	13.1	1.2	▲ 4.2	▲ 0.0	8.8
	7-9月期	6.7	10.7	10.5	3.7	▲ 0.1	▲ 1.9	▲ 5.3	2.2
	10-12月期	6.4	▲ 7.2	▲ 9.3	25.6	▲ 1.7	▲ 8.7	▲ 7.4	6.0
05	1-3月期	▲ 8.1	▲ 23.0	▲ 21.4	14.5	▲ 2.9	1.8	1.0	▲ 3.0
	4-6月期	▲ 9.8	▲ 30.4	▲ 29.7	18.4	▲ 3.3	▲ 25.9	▲ 22.0	14.8
	7-9月期	▲ 1.5	▲ 35.2	▲ 31.7	28.5	▲ 0.5	▲ 21.3	▲ 17.2	8.9
	10-12月期	8.6	▲ 12.1	▲ 18.1	29.0	22.5	53.1	25.5	9.4
04	12月	34.6	13.6	▲ 0.0	52.9	10.8	5.2	▲ 2.1	10.9
05	1月	▲ 27.9	▲ 105.7	▲ 47.5	12.4	▲ 9.9	▲ 0.9	7.1	▲ 7.4
	2月	▲ 3.3	▲ 17.4	▲ 20.6	18.6	5.0	▲ 5.0	▲ 11.1	3.1
	3月	▲ 2.1	▲ 6.7	▲ 9.8	12.4	▲ 17.1	▲ 11.5	▲ 5.3	▲ 12.4
	4月	3.9	▲ 2.4	▲ 7.1	15.2	1.9	▲ 31.1	▲ 20.0	29.4
	5月	▲ 18.6	▲ 63.5	▲ 60.8	27.6	6.8	20.9	▲ 0.7	▲ 5.6
	6月	▲ 14.6	▲ 22.4	▲ 24.4	3.5	4.4	12.3	17.5	▲ 0.8
	7月	3.2	▲ 20.2	▲ 21.8	24.2	▲ 6.9	▲ 32.5	▲ 23.6	9.3
	8月	▲ 16.1	▲ 93.3	▲ 69.4	28.1	▲ 9.4	▲ 11.5	▲ 10.2	▲ 4.8
	9月	6.1	▲ 19.3	▲ 20.8	33.7	26.1	33.1	15.4	16.9
	10月	2.6	▲ 27.3	▲ 29.2	44.0	3.8	21.4	3.5	0.0
	11月	15.1	11.4	0.3	11.2	▲ 6.2	12.8	29.8	▲ 19.8
	12月	8.6	▲ 11.0	▲ 16.7	38.1	29.0	2.2	▲ 12.7	50.9

(出所)財務省「国際収支状況」

## ○ 所得収支黒字が大幅増加

本日公表された12月の経常黒字額は前年比+8.6%の1兆7,484億円(原数値)と4ヶ月連続の前年比増加となり、事前の市場予想(コンセンサス15,929億円、前年比▲1.1%、レンジ13,879~17,920億円)を上回った。また季節調整値でも前月比+29.0%と大幅に増加しており、経常黒字が05年秋をボトムに持ち直しつつあることが改めて確認された。

内訳を見ると、貿易黒字が前年比▲16.7%と縮小した。輸出金額は同+18.7%と好調ではあるのだが、原油高(原油輸入価格:同+58.2%)の影響によって輸入金額が同+30.4%と急増していることが響いている。一方、所得収支黒字は同+38.1%と大幅に増加した。前年比での増加は17ヶ月連続、前月比でも+50.9%と急増している。今月の経常黒字額がコンセンサスを上回ったのは所得収支黒字の伸びが予想以上に高かったことによる。12月は期末ということもあって受取が大幅に増加したことが予想以上の拡大に寄与したものと思われる。後述の通り、所得収支黒字は基調として増加傾向にあり、今後も経常黒字の下支え要因として働くだろう。

## ○ 2005年の経常黒字は小幅縮小

2005年(暦年)の経常黒字額は18兆479億円と、前年比▲3.1%の小幅縮小となった。暦年ベースで経常黒字額が縮小するのは4年ぶりのことになる。最も影響が大きかったのは、貿易黒字が前年比▲25.5%と大幅に縮小したことだ。これは、原油価格の高止まりの影響で輸入金額が前年比+17.8%と大幅に増加したことによるものである。また、世界的なIT関連財の在庫調整の影響でIT輸出が落ち込んだことに加え、中国向け輸出の不振もあって、2005年前半に輸出が低迷した影響も大きかった。年後半に輸出は持ち直しはしたものの、前半の貿易黒字の大幅縮小を相殺するには至らなかった。

もともと、貿易黒字が大幅に縮小した割には、経常黒字の縮小幅は小幅なものにとどまっている。これは、所得収支黒字が前年比+22.5%と大幅に拡大したためだ。海外日系子会社の業績が好調だったことから配当金や再投資収益が増加したほか、対外資産残高の拡大を背景として証券投資収益も大幅な増加となった。この結果、2005年の所得収支黒字額は過去最高となり、貿易黒字の水準を上回った。経常黒字の動きを説明する際には貿易黒字をイメージすることが多いと思われるが、2005年に関してはそうした状況は必ずしも当てはまらない。このように、所得収支黒字が経常黒字に与える影響は年々大きくなっている。

以上から、2005年の経常黒字の動向を簡単にまとめると「貿易黒字が大幅に縮小した一方で、所得収支黒字の増加が下支えすることにより、経常黒字全体の縮小幅は小幅なものにとどまった」ということになる。

なお、その他の項目としては、サービス赤字額が9586億円縮小している。日本企業の海外現地法人が(日本で通関せずに)他地域に輸出を行う場合、仲介貿易手数料がその他営利業務受取に計上されるのだが、2005年も海外現地法人の活動は引き続き活発だったことから、こうした受取額が増えている。また、2004年に高騰していた海上貨物運賃市況が2005年にはやや落ち着いたこともあって外国船社への支払貨物運賃が減ったため、輸送収支赤字が縮小したことも、サービス赤字縮小に寄与したようだ。

## ○経常黒字は先行き拡大へ

では、先行きの経常黒字はどのように推移するだろうか。

所得収支黒字については、前述の状況に変化はないとみられることから、今後も順調に拡大を続けていくと思われる。

次に貿易黒字についても、12月は減少したものの、先行きに関しては状況は悪くない。まず輸出に関しては、当面大きな心配はなさそうだ。地域別では中国向け、財別ではIT関連財輸出を中心として、足元で輸出は改善傾向を明確化させている。実際、貿易黒字を季節調整値で見ると、こうした輸出の増加を背景として、05年秋をボトムに持ち直しつつある。輸出の動向に5ヶ月程度先行する傾向のあるOECD景気先行指数(6ヶ月前比年率)を見ても、足元12月まで8ヶ月連続で改善するなど、輸出を取り巻く環境は良好だ。今後についても、海外経済が順調に拡大を続けると見込まれることから、引き続き回復が期待できる。また、輸入に関しては、今後も高水準での推移が続くと予想されるが、原油価格のさらなる急上昇といった事態を想定しなければ、伸び率で見ると徐々に鈍化してくるだろう。したがって、貿易黒字は今後、単月の振れを伴いながらも持ち直しが明確になると予想される。これまで不振だった貿易黒字が持ち直してくることは、経常黒字にとって大きなプラス材料だ。

以上の通り、所得収支黒字の拡大が続くなか、貿易黒字も持ち直すことから、2006年以降、経常黒字は増加傾向を明確化させてくるとと思われる。

